

使用済み紙おむつ 再生

家庭から出る使用済み紙おむつを回収してパルプをリサイクルする全国初の取り組みが今秋、福岡県大木町で始まった。高齢者人口の増加に伴って高齢者用紙おむつの廃棄量が増え続けているだけに、革新的な取り組みは全国の自治体から注目を浴びている。【青木絵美、写真も】

回収箱に使用済み紙おむつを入れる川上カツコさん。専用袋は3日間でいっぱいになり、水分を言むため重みもある。福岡県大木町で



町は「焼却・埋め立てをしない町」実現を目指し、3年の試行期間を経てリサイクルに踏み切った。製造大手ユニチカ（東京港区）などの協力で、24時間投入可能な専用回収箱を約50カ所に設置。利用者は取れるだけの汚物を取り除き、有料回収袋（10枚150円）に入れて捨てる。回収は週2回。民間企業「ト

全国初 家庭対象

福岡でスタート

ータルケア・システム（本社、福岡市、長武志社長）の再処理工場（福岡県大牟田市）で水や塩化カルシウムなどと混ぜて処理する。取り出したパルプは防火壁など建材に、ビニールは固形燃料、衛生処理した汚泥や吸水ポリマーは肥料に生かす。町は10月1日の事業開始以来、今月13日までに計111ト、1日平均552kgの

使用済み紙おむつからのパルプ製の防火壁材（右）と再生紙おむつ。福岡県大牟田市で

紙おむつを処理したという。大木町の09年度の可燃ごみ処理費は約4300万円、紙おむつ廃棄量は全可燃ごみの約1割（08年度は約117ト）だった。ごみ処理コスト



全体を見直し、新たに生じるリサイクル経費をほぼ吸収した。焼却量が減るため、あと15年とされる焼却工場の稼働寿命も延ばせる。

町民の反応は好意的だ。介護が必要な実母と2人の孫がおり、毎日10枚以上使うという町内の主婦、川上カツコさん（68）は「水気を含むため（回収箱に運ぶのは）重たいが、リサイクルに役立つので積極的に利用している」と語る。「トータルケア」は「再生パルプの量が確保できれば、再生紙おむつの生産も目指したい。技術は確立している。地域ごとに回収・再生利用するシステムを整えば、雇用を生み、社会インフラにもなる」と期待を込める。

日本衛生材料工業連合会によると、国内の10年度の紙おむつ生産は、子供用が86億枚、大人用が54億枚の計140億枚。大人用はここ数年、前年比約10%増で伸びている。大木町や工場には全国の自治体や企業から問い合わせが

殺到。今月19日までに工場を視察した自治体は、九州を中心に10を数えた。

一方、関西からの問い合わせは少ないという。ある大規模市は「きめ細かな分別は難しい。古紙やペットボトルなど、紙おむつの前に徹底する必要があるリサイクルが多い」と理由を説明する。

鳥取県伯耆町も、11月から事業系の紙おむつリサイクルを本格的に始めた。町内5カ所の病院・高齢者施設から出る1日400〜450kgの紙おむつを固形燃料に再処理する。2〜3年先の家庭回収スタートも視野にあるが、町環境整備室は「分別指導や住民の理解を徹底させる期間を十分に取りたい」としている。

リサイクル事情に詳しい鳥取環境大の田中勝・特任教授（廃棄物工学）は「処理量を十分確保して安定的に施設を稼働するとともに、再生した物質の付加価値が社会で認められるかどうか普及の鍵」と指摘している。